

狭間の繕い

- 観天望気の湯屋 -

古谷・藤井研究室 修士3年
5219A006-0 風陽向

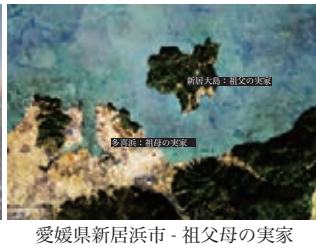
自然から受ける様々な災害と驚異、その一方で美しい景色や安らぎ、恩恵があります。
人間の一方的な関係性の押し付けが増長する現代で、海と陸の間で生きる私たちの在り方の一つの選択肢としてこの計画を提案します。



- 序 - 自身の記憶と海際の現在



東京都新宿区西新宿



愛媛県新居浜市 - 祖父の実家



海と親しく暮らしてきた町

都会で生まれ育った私の原風景である祖父の実家。海と親しく暮らしてきたこの町も、20年の間に大きく変容している。



自身の記憶

小さい頃はよく海辺や砂浜、海岸で遊び、楽しさや美しさ、そこに生きる生き物や植物を学び、恐ろしさや危険さも同時に学んだ。それら全てが普段都会で生活する私にとって驚きであり、大切な記憶だった。



記憶の場所の現状

祖父が亡くなり、20年ぶりに訪れてみると、海際にはメガソーラーや堤防が立ち並び、昔の祖父母との記憶は戻らないものになっていた。安全のかわりに失われる物があるのではないか。

-01- 海岸線の関係性を問う新たな場所の提案



自然との境界に線を引く現代



自然と関わり続けた過去

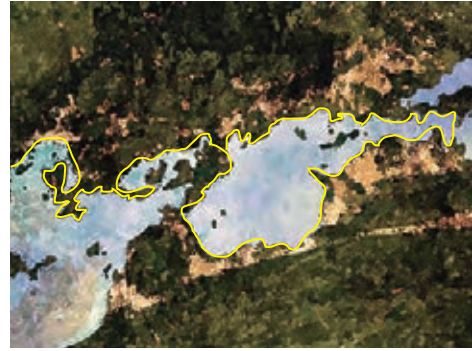


狭間に新たな選択肢を作る

「ヒトの理解の中で決められた安全」が島国を囲み続ける現代。本計画では海岸線に内在する関係性を読み解き、「ヒトの生活と自然がひとつなぎでいられる」ような新たな選択肢を提案したい。

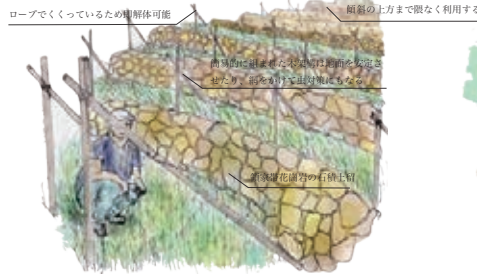
-02- 瀬戸内海沿岸部の生業と自然

卒業計画の際も瀬戸内海の海と、どう関わっていくかを考えた。自分にとってこの場所が思考の発端であり、大切な物であると思う。本計画でも瀬戸内海から計画の示唆を得られないかと考え、2ヶ月かけて海際約200kmを様々な手段でフィールドワークを行った。その中で2つの要素を見出し、記録や分析、ドローイングを行う事で自分の中で言語化し設計に転化していく。一つは海際に存在する生業がもつ修復と構築のプロセスである。自然の驚異も恩恵も同時に受け入れながら生活していくための知恵があった。もう一つは海と陸が取り合う場所に存在する岩石海岸である。美しく恐ろしい空間を分析する事で新たな体験を持った建築が生み出せる建築が生み出せると思った。

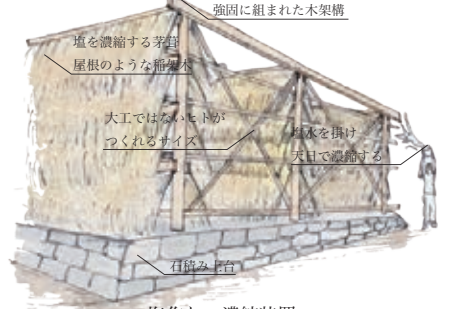


瀬戸内海の内海 約200kmのフィールドワーク

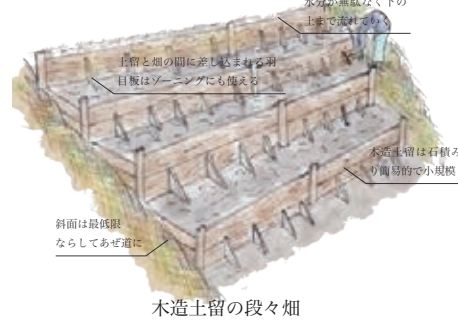
-02-1- 海際の生業における構築と修復のプロセス



石積み段々畑



塩作りの濃縮装置



木造土留の段々畑

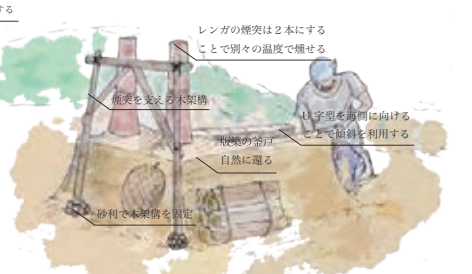


場所の獲得としての構築

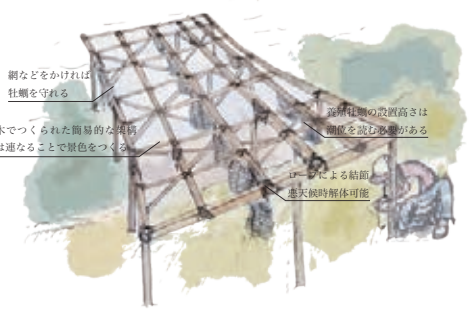


自然物の集積と修復

自然の恩恵も、自然の驚異も同時に受け入れることがこの地で生業を保つ要因になっている



魚を焼すかまど



養殖の架構

海際で産業を行っていくための構築を記録し話を聞きながら分析を行った。どの構築も大工のような建築のプロは携わっておらず、その土地の材を使用して各々の工夫を凝らして作っていた。同じ産業でも場所が違えば自然の条件が替わるため、これは一部の情報でしか無い。本来なら防潮堤を建てる際にも同じようなことが言えるはずであるが、国がトップダウンに制度を決めると全地域で画一的な物が生まれてしまう。本計画ではこうしたその地域の天候や自然、生態を緻密に分析しながら、またここに来る人がそれらを観察し学んでいけるような場所を提案したい。



自然の変異を察知する助けとなる構築

農家や漁師にとって天候を予測することは非常に重要な能力である。雲を見て雨を予測したり、湿度や気温で波のしけを予知したり、山の位置で漁場を記憶したり、風や波の音で時間を当てたり。そうした熟練の予知を「観天望気」と呼ぶ。しかし現代で生活を送る人からは失われ、感じ得ないものになった。

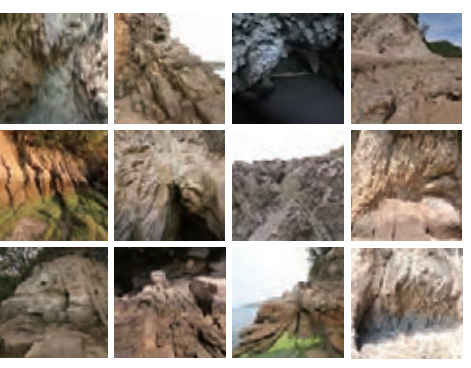
-02-2- 海と陸が取り合う空間

この分析では先程見出したヒトの構築を、自然が取り合う場所に散りばめていく際の空間設計の指針を抽出する。もともと陸地であった瀬戸内海はピンク色に示される地層は同年代のもので同じ性質をもっている。この海岸線をフィールドワークする中で海と陸が取り合いつづける空間として「岩石海岸」に着目した。同一の地質でも削られ方、摂理の状態に同じものは存在せず、波と地層の関係の連続を表した空間と捉えて調査を行った。

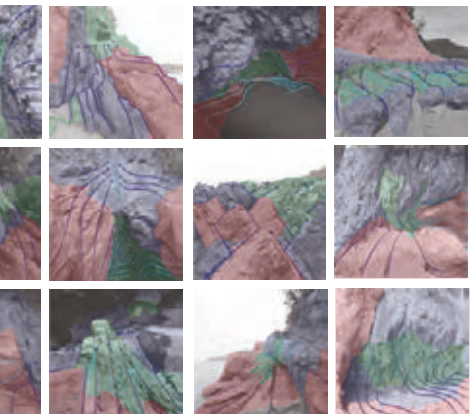
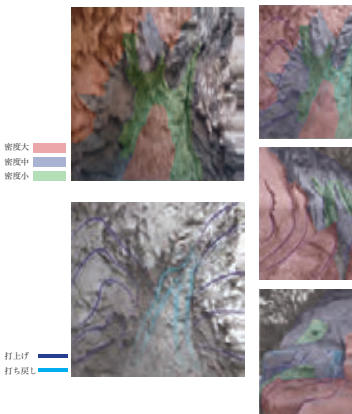


瀬戸内海周辺の時代別地層図

約200kmを移動しながら記録し、その中でも特に自分が惹かれた空間を12箇所選定した。摂理と波の力線の関係によって空間原理を、ドローイングによって空間構成要素にわけて分析を行い、自身が感じた、美しさや恐ろしさの言語化を試みる。空間原理は集積した岩石の密度の大小、加わる外力の変化によって日々異なる様相を見ながら地形全体で大きな力の流れをみせている。空間構成要素は線の集中4種類によっていくつかの現象が場所ごとに表出し、細やかな線と鈍重なフォルムが変異しながら組み合わせられている。まとめると岩石の持つ多層性と密度の大小に加わる外力によって空間に他視点的な状態が生まれ、特異な現象を体験できることがわかった。



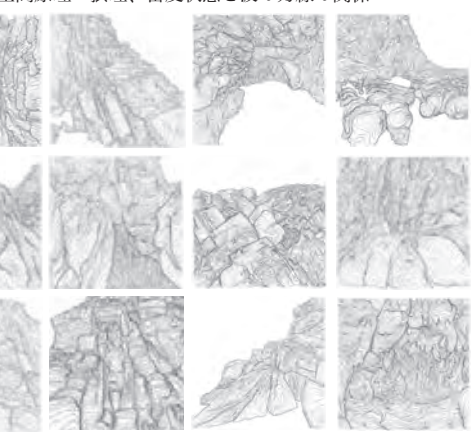
自身が特に惹かれた12箇所の岩石海岸



空間原理：摂理、密度状態と波の力線の関係

空間原理
摂理しない密度を持つ部分
-古くからの痕跡でありグリグリと変化する
摂理が崩れ密度が粗くなり始めている部分
-変化を示唆する
摂理が進行し密度が粗な部分
-変化、崩壊の最中で次の空間を予感させる

空間構成要素
線の集中
対比・分散・接続・連続
×
現象
陰影・興行き・多消失点・地続き



空間構成要素：線によるドローイング

-02-3- 分析まとめ

自然とヒトの生活が連なる場所を提案するための要素

1. 修復を前提とする
2. 自然物の集積で作る
3. 「観天望気」を現代の人でも感じ取れる空間



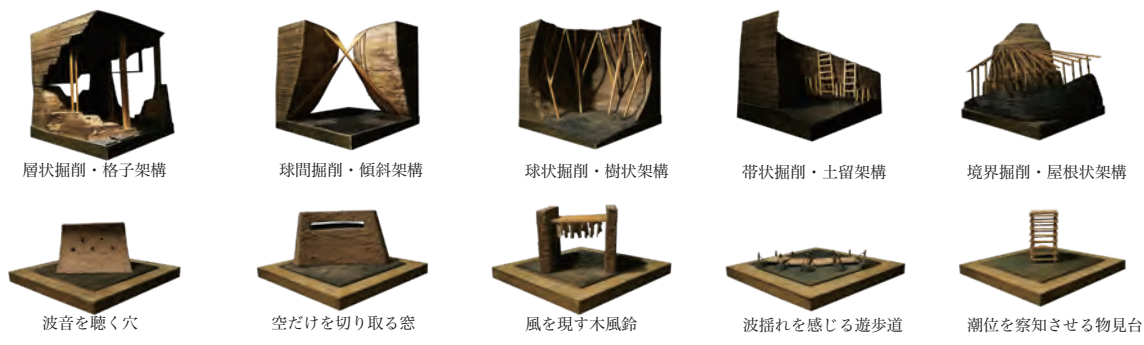
岩石海岸の空間分析

空間原理
摂理しない密度を持つ部分
-古くからの痕跡でありグリグリと変化する
摂理が崩れ密度が粗くなり始めている部分
-変化を示唆する
摂理が進行し密度が粗な部分
-変化、崩壊の最中で次の空間を予感させる

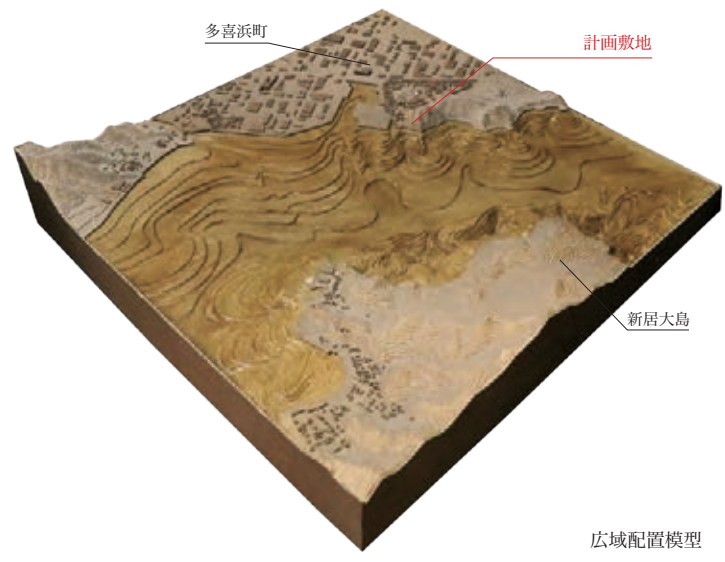
空間構成要素
線の集中
対比・分散・接続・連続
×
現象
陰影・興行き・多消失点・地続き

-03- 空間モデルの作製

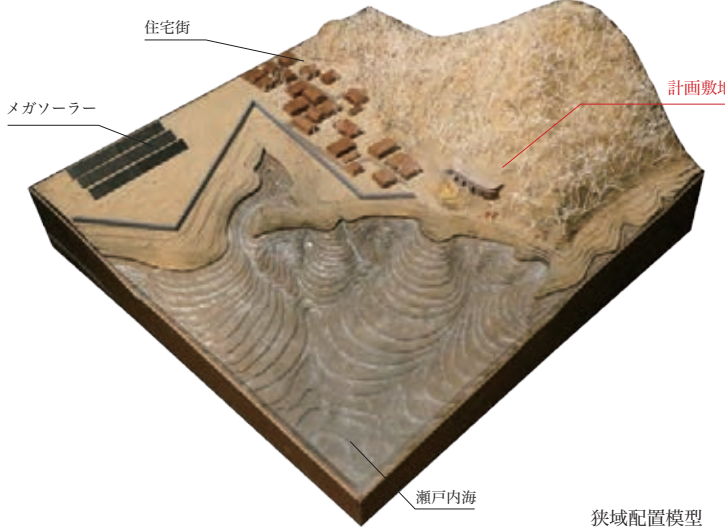
岩石海岸の空間分析をもとに、場所の獲得としての構築モデル5つ、自然の変異を察知する助けとなる構築5つ、計10個を作製した。これらのモデルは自然の狭間のなかでヒトが無意識に身体感覚を研ぎ澄ますためのものであり、日常的に訪れることで破損部分や見える景色の変化を感じ取れるようにするものである。



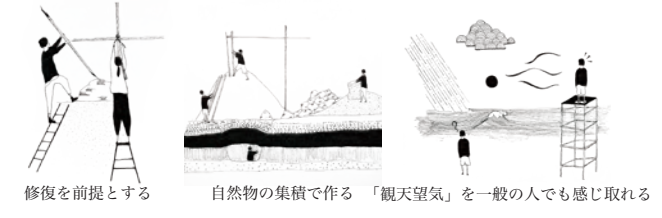
-04- 敷地



敷地は黒島と呼ばれるもともと島だった場所。対岸に新居大島があり、海中には海釜と呼ばれる特殊な地形も存在している。小さな平屋の住宅が集中し、船着き場や港も近い。しかし理め立てや整備によって海際のカタチは直線的に変わり始めている。

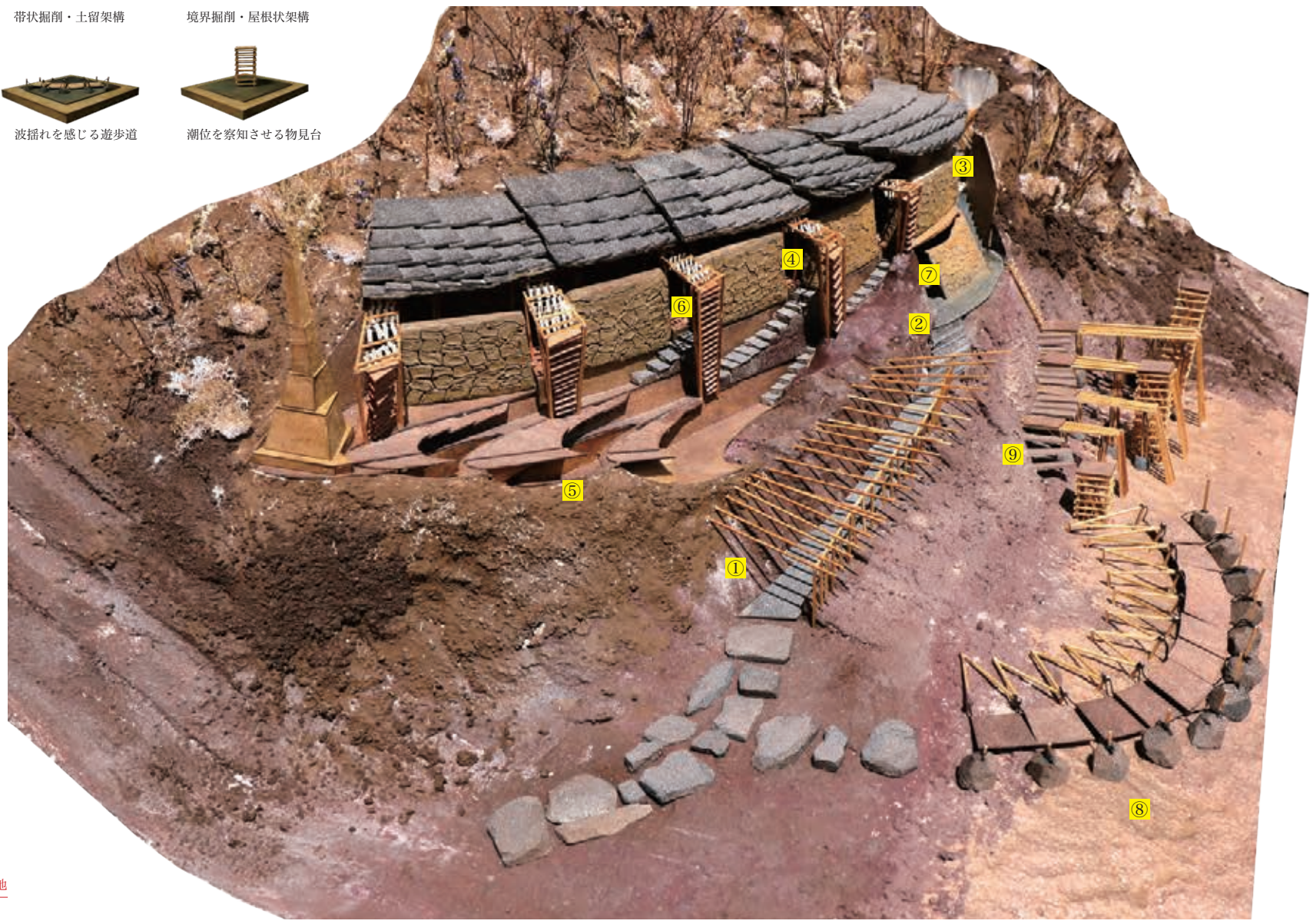
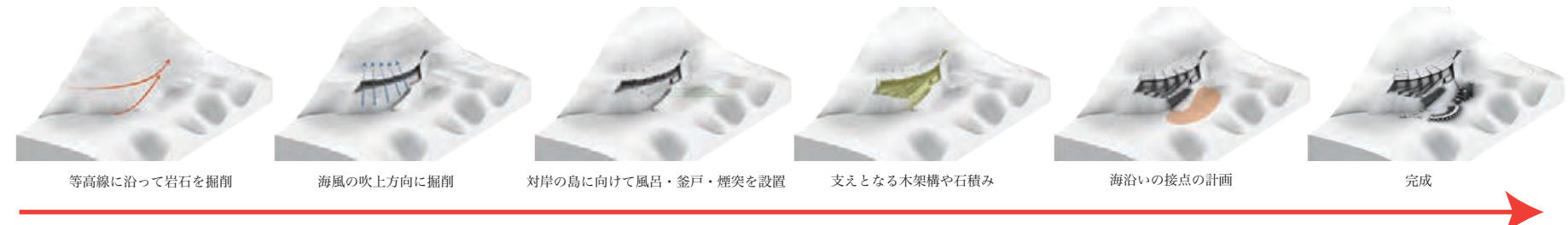


山、陸、海、砂浜、岩石などの自然と、住宅街、堤防、メガソーラーなどの人工物が狭い中に取り合う場所。堤防やメガソーラーにより住宅街から海は見え、砂浜で遊んだり、岩石海岸で生き物を見たりすることはできなくなっている。



-05- 設計順序

修復可能な自然物で建築を構成していくため、コンクリートや金属、カーボンやプラスチックは使用しない。そのため空間を獲得していく掘削行為が主体となる。特に瀬戸内の島々では石切の技術が高く、古くから花崗岩を切り出していた。本計画でも山の等高線と風の方向に岩盤を切り抜きながら風の方向にそれらが簡単に崩壊しない様木材や石材、版築を用いて支えていく。



住宅街を抜けた海と山の間につくられた細いスロープ、岩盤を縫い合わせるように掛けられた低い架構をくぐりアプローチする。架構は細かく景色を切り取り、狭間へ導く。



架構を抜け後ろを向けば風呂と釜戸と煙突が斜面地に連なっているのが見える。かまどの木材は建築廃材などを用い、煙突は版築で作る。



狭く細い裂け目のような空間に向かい、裸足で飛び石を感じながら歩くと海風でここで靴を脱ぐ。雨の日は奥の水盤に水がたまり空を写す。細やかな架構は空に気づく。重厚な石壁の隙間から空の様子を向けさせるが石畳が微小な段差を持つているため足元にも集中する。



裸足で飛び石を感じながら歩くと海風でここで靴を脱ぐ。雨の日は奥の水盤に水がたまり空を写す。細やかな架構は空に気づく。重厚な石壁の隙間から空の様子を向けさせるが石畳が微小な段差を持つているため足元にも集中する。



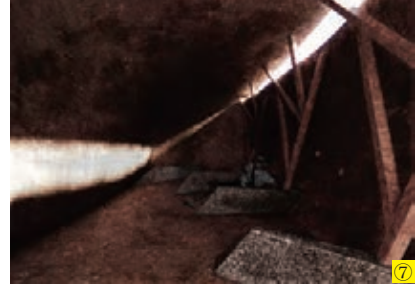
服を脱ぎ風呂につかると地平線が切り取られる向かいの新居大島がよく見え、湯のなかで海との一体感がより感じられる。下階の屋根はお酒や風呂桶を置く場所にもなり、一日の中で至福の時を過ごす。



満潮時は通常の入り口が水没し、小さな船をつかってアプローチする。水没する横材の位置で潮位がわかる物見台は満潮時に船着き場になり、海と接する場所となる。



水が増すと遊歩道はロープが張り、波の揺れを感じられる小さな橋に変わる。子供の遊び場としても多くの学びがある場所として計画した。

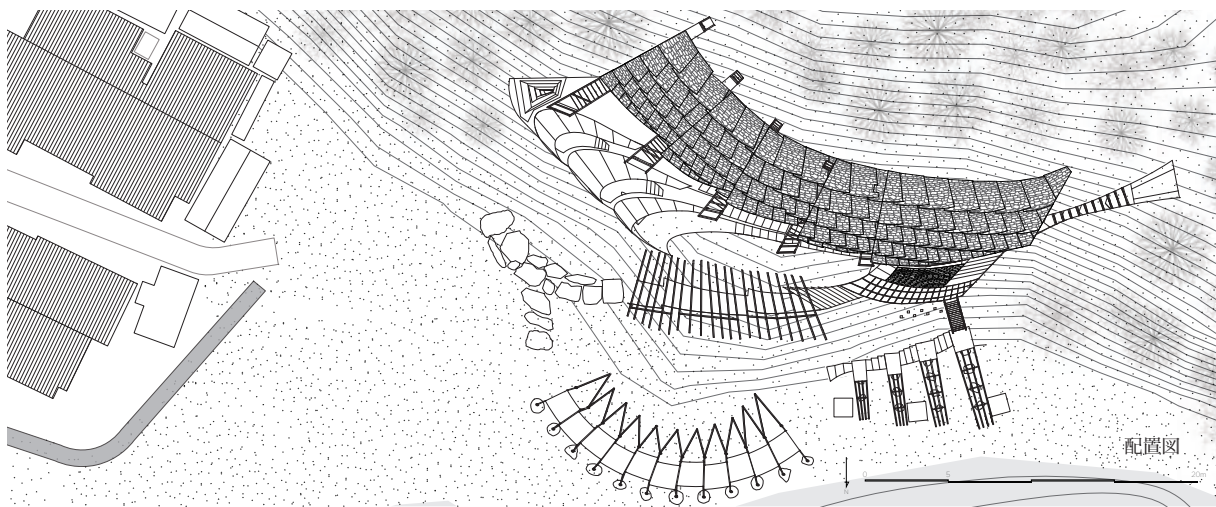


風呂上がり、火照った身体を冷やすためにここで涼む。海は見え、薄暗いなかで目を閉じれば、背後にある穴から、波の音が聞こえて来る。



シャワーに向かうとき、服を着ているときより、触れる自然物や風をより感じることができる。風の時間にここにくれば木風鈴が音をたてない静寂を楽しむこともできる。





-06- ヒトと自然・時間と建築



日々この場所を修復し、自然の変化に触れる



何年か先、この場所は自然に還る



木は腐り新たな生態の土台に



岩や石は砂になり海の循環を助ける



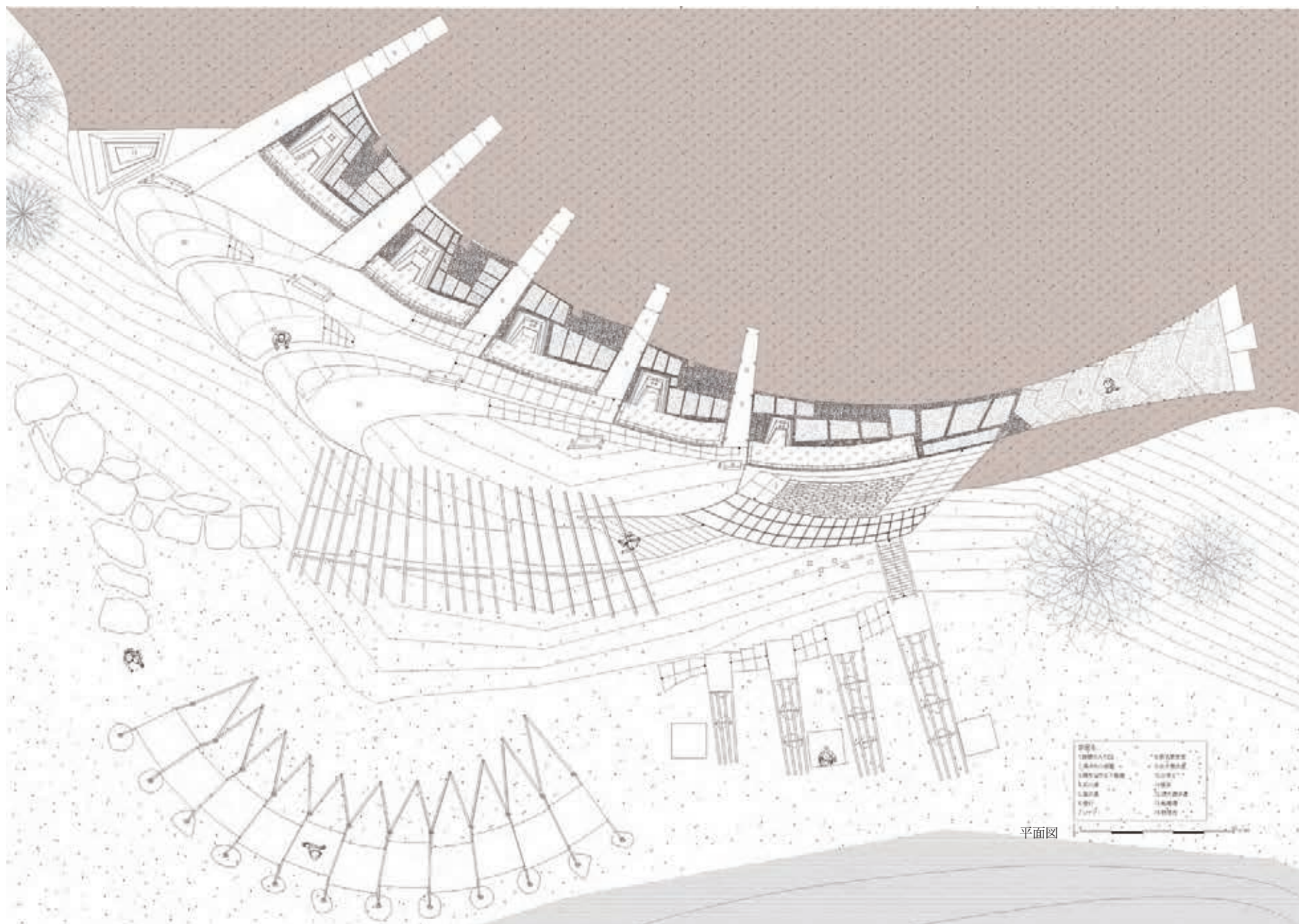
空間は生き物の住処に

どの空間も毎日変化する自然の要素を切り抜いており訪れたヒトは日々のちいさな自然の変化に気づき、脅威を察知したり美しい景色を見ることができるかもしれない。

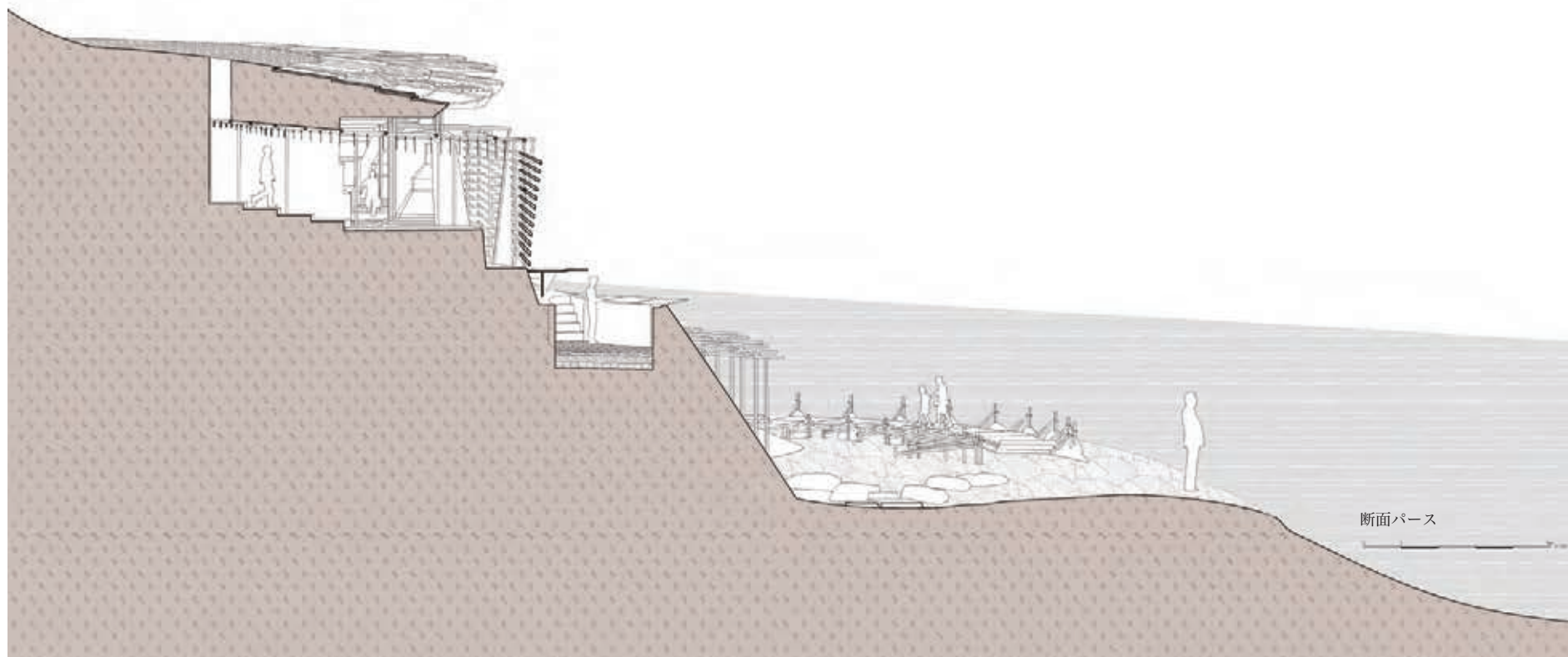
何年先か、ここにひとがいなくなり海面が上昇していけばヒトのためにつくられた構造は自然に還っていく。
木は腐り新たな生態の土台に、石や岩は削られ砂となり海の循環を助けとなる。掘削した部分は生き物のすみかにも変わるかもしれない。

自然が取り合う場所に関わり続けるプロセスを考えることで、
100年先の場所に想いを馳せる。

大地や海との不遜な関係性が見過ごされたままの今日において、この計画を、これから先建築をつくり続けていく僕自身のひとつの指針として結びとします。



平面図



断面パース

